〈童心〉をめぐる攻防
――野溝七生子『眉輪』――

橋本のぞみ

はじめに

野溝七生子は、大正の末から昭和にかけて広く活躍した作家・教育者である。自身の少女時代に材を採った『山梔』が新聞の懸賞小説に入選し、デビューを果たしたのが、一九二四（大正一三）年。以後、数々の創作や評論を発表するとともに、東洋大学などで教鞭をとった。

野溝が『山梔』の発表と同時期、一九二五（大正一四）年に執筆したとされる小説『眉輪』は、『古事記』や『日本書紀』に記された眉輪王の変を描いたものであり、皇室を題材としたため、長らく日の目を見なかった作品である。雑誌『映画時代』の小説公募に応じて書かれ、その審査員であった菊池寛・久米正雄が公募作品のうち第一席に推したとされるが、詳細は伝わっていない[1]。しかし、野溝本人はこの作品に思い入れがあったのであろう、一九八一（昭和五六）年には旧稿に手を入れ、決定原稿を残していたのだという[2]。

七五年もの時を経て、ようやく二〇〇〇（平成一二）年に上梓された『眉輪』（展望社）であるが、その作品世界についての研究はほとんどなされていない[3]。果して、『眉輪』は長い沈黙を強いられるほど、危険な思想を滲ませているのだろうか。本稿では、作品の構造や隠れた物語、鏤められた寓意を読み解くことで、小説のメインテーマが時局とは無縁の、〈童心〉の存亡をめぐるドラマにあることを明らかにしたい。

一　原典との差異

はじめに、原典である『古事記』（「安康天皇」の章）の内容を確認しておきたい[4]。穴穂御子（安康天皇）が根臣を大日下王のもとに遣わせ、妹・若日下王を御子の同母弟・大長谷王に嫁がせるよう伝えるところから話は始まる。大日下王は快諾し、その礼物として宝冠・押木玉縵を御子に献上するが、根臣は私欲に駆られてこれを奪い取り、申し込みは斥けられたと讒言する。根臣を信じた穴穂御子は、大日下王の正妻である長田大郎女を奪い去り、皇后としたのだという。穴穂御子は皇后に対し、彼女の息子・目弱王（眉輪王）が自分を父の敵と知り、仇を討つのではないかという恐れを口にするが、これを漏れ聞いた七歳の目弱王は、眠りに就いた穴穂御子を近くにあった太刀で斬り殺し、都夫良意富美の邸に逃げ込むのである。

兄王の惨殺を知った大長谷王は、兄の黒日子王と白日子王をそれ

ぞれ訪ね、二人の事件に対する関心の薄さに憤って、彼らを殺害する。憤怒に駆られて都夫良意富美の邸を取り囲み、猛攻撃を仕掛ける大長谷王のまえに、目弱王は落命を余儀なくされ、都夫良意富美もまた自死を遂げるという顛末である。その後、忍歯王を引き連れて近江に向かった大長谷王は、狩り場で彼を斬り捨て、地中に埋める。この事変を聞いた忍歯王の御子二人が逃亡し、身分を隠して播磨国の住人・志自牟の家に入り、馬飼や牛飼として使われたことを記して、「安康天皇」の章は幕を閉じる。

続く『日本書紀』の内容は、ほぼ『古事記』のそれと重なるが、[5]人名の漢字が異なるほか、いくつかの加筆が認められる。第一に挙げられるのは、穴穂御子の即位に先立ち、兄・木梨軽皇子とのあいだに起った争いの記述であろう。軽皇子は「婦人への暴虐」があったために人民や群臣の信を失い、皇位をめぐり穴穂御子の軍に取り囲まれて自刃に追い込まれてしまう。また、大泊瀬皇子の結婚を決める場面において、候補とされた女性が彼の恐ろしさを理由に辞意を伝える件も同じく前書にない。さらに、大草香皇子が死に追い込まれた後、彼に仕えていた難波吉師日香蚊の父子が主の死を悲しみ、殉死したことや、眉輪王により安康天皇が殺されてから、黒彦皇子が大泊瀬皇子を恐れて眉輪王ともども円大臣の邸に逃げ込んだことが記されている。総じて、『日本書紀』における記述は、『古事記』と比べ、人の心の動きをより重視したものとなっていよう。

これらに対し、野溝の『眉輪』では基本的な事柄を『古事記』に拠りつつも、人名表記が異なるほか、主人公を安康天皇から眉輪王へと変えている点が目を引く。眉輪王を単なる不忠の殺人者あるいは、夭折の悲劇的人物としてではなく、父を亡くし、母を恋い慕う一人の少年として描き出しているところに特色がある。根臣の讒言により、父・大日下王が逆賊として不遇の死を遂げた後、母が安康天皇の王妃となり、叔母である王女が大長谷王子のもとに連れ去られるという状況下で、眉輪王は母のもとから引き離され、円大臣の邸に移されることになった。円大臣とその娘・韓媛から温かく庇護されながらも、彼は大長谷王子による横暴から逃れるため、また、母や叔母恋しさに駆られて幾度も邸を抜け出し、母のいる石上と伯母の居所である朝倉、生まれ育った日下との間を絶えず往還することになる。

その間、叔母の乳母を務めた朽木媼が常に傍らに寄り添って眉輪王を支え、日下の地を彼の手に取り戻すべく、奔走する。やがて、彼女により根臣の罪を知らされた眉輪王は、父の潔白を証すために母のもとを訪ねるが、そこで安康天皇が軍を遣わせて父を死に追いやったことを漏れ聞き、天皇を惨殺するに及ぶ。

このように眉輪王が大逆罪を犯すまでの過程に筆を費やし、彼や周囲の人々の心の中を焦点化していることや、朽木媼の献身などは、原典と大きく異なる展開・設定である。元凶となった根臣の企みが、白日のもとに曝されるという結末も新しい。加えて、弑殺の罪を犯した眉輪王が大長谷王子の軍に滅ぼされた後、朽木媼や韓媛、王妃、王女らの連帯により、根臣が断罪され、荒廃した日下の地が再び王女らの手に取り戻される結末は、長らく伝えられてきた一連の事件に関する殺伐とした印象を大きく逆転させたとさえいえよう。眉輪王による「王殺し」、「父殺し」の罪が問われるのではなく、そこに至るプロセスやその後の顛末に光を当てる点が、『眉輪』の真骨頂といえるだろう。

では、野溝が『眉輪』に込めたメッセージは、どのようなものなのだろうか。

二　叙事詩という枠組み

まず、『眉輪』一編が、叙事詩としての性質を色濃く帯びている点に着目したい[6]。周知のように、叙事詩とは「英雄詩とも呼ばれ、歴史や伝説に現れる神や英雄の事績を高揚した文体で歌う長編の物語詩」を指し、「ギリシアのホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』が代表的な作品[7]」である。そもそも、野溝といえばギリシャ神話に関する造詣が深く、代表作『山梔』をはじめ、その要素が散見される例は多い。そもそも、原典の『古事記』や『日本書紀』自体、少なからず叙事詩の性質を有するといわれるものの、とりわけ『眉輪』では、この特質が強調されているように思われる。

確かに、『眉輪』は散文の形式を採ってはいるが、「序の詩」と題された章から幕を開ける点や、「希臘古詩」等をいくつかの章の冒頭に鏤めている点が示唆的である。また作品中、冒頭部では「私の友よ、わが竪琴に聴くか、これは千古の伝説に残る私達の遠い祖先の物語」と、吟遊詩人の言を思わせる一節があるほか、ところどころに噂や伝聞の形が鏤められており、語り伝えられる叙事詩の趣を色濃く宿す。その該当個所としては、例えば「それはやがて、無数の多数の意志を代表するものであるのかも知れない」、「それについては、このような取沙汰が伝へられてゐる」、「人々は皆、いつか眉輪王の健在を伝説のやうに信じ」、「この話が、いつとなく里人の間に伝はつた」、さらには「恐らくこの物語も、その夜の月が、後の夜の月に語り伝へたものであつたのかも知れない」など、枚挙に遑がない。「まるで預言者みたい」と語られる老婆・朽木によって話が展開していくさまも両者の共通点として看過できない。

このように叙事詩の様相を呈する『眉輪』は、おのずと神や英雄の事績を謳う作品としての性質を帯びるだろう。安康天皇や雄略天皇を称揚した原典とは異なり、ここで英雄視されているのが眉輪王であることは、表題から明らかだ。本作品では、従来、反逆の徒とされてきた彼を中心に据え、その行き方を後世に語り継ぐべきもの、と捉えていることになる。では、英雄視される眉輪王のあり方とは、一体どのようなものなのだろうか。

三　心的成長の旅

結論を先走っていうならば、この小説が語り継ぐべき大事としてクローズアップしているのは、人が成長過程で喪失していく子供の「心」、すなわち〈童心〉の尊さである。〈童心〉の体現者である眉輪王が、民衆の「心」を強く惹きつける英雄として扱われていく。このような趣旨を浮き彫りにするため、多岐にわたる表現が随所に用いられていることを順次、検討していこう。

作品中で多くの頁を費やされるのは眉輪王の移動（大げさにいえば旅）であるが、特に男子の場合、移動や旅は、しばしば成長過程と重ねて語られるものだ。また、これが眉輪王の六歳から七歳にかけての話であることも意味深い。古来、「七歳までは神のうち」といわれるように、彼の年齢が聖俗を分ける特別な時期にあたっていることが思い合わされる。聖なるものから俗なるものへ。この画期で生じる「心」の変容や葛藤を異化する形で、物語は展開していく。

そもそも、『眉輪』が内面の問題を前景化した小説であることは、

「心」の語が頻出することから容易にうかがえる。冒頭から末尾に至る多くの場面が、ことごとく夕方から夜にかけての時間帯に設定されているのは、描かれる事象が表層からはうかがい知れない暗闇の部分、無意識領域に属するからであろう。眉輪王が度々「夢」の語を口にすることや、実際に眠りのなかで夢見る彼の姿が散見されるのも、それゆえと考えられる。

興味深いのは、この眉輪王の旅が、二つの文脈を内包していることだ。その一つ目として、これが男子の心的成長を表すエディプス・コンプレックスをめぐる物語となっていることを指摘したい。エディプス・コンプレックスとは、フロイトにより提唱された精神分析の用語である。「異性の親と親密になりたいという願望と同時に同性の親に激しい競争心を抱くこと」であり、男子に多いとされるものの女子にも見られ、両性ともにその深層で「母親との対象関係が問題となる」のだという。[8] つまり、男子においては象徴的な意味での「父殺し」であり、父を乗り越えていく過程を指す語なのであるが、そのような心的現象を実体化し、しかも事件として描いたのが、本作品である。誰もが、程度の差こそあれ経験する通過儀礼を普遍的なことと軽視せず、事件にも匹敵する一大事として掬いあげる野溝の視点が明確な設定であろう。このような精神的成長が生じるとされる時期が、まさに眉輪王の年齢と一致していることも偶然ではない。

眉輪王に即して具体的に見てみよう。彼の場合、本来は敵意を持つ対象であるはずの実父が序盤で亡くなってしまう。実父の代わりに敵視されるのが、実父を滅ぼして母を奪い去った義父・安康天皇である。反抗の対象となる義父から受けた傷がこのように大きい分、眉輪王におけるエディプス・コンプレックスはいっそう強いものとならざるを得ない。実父の死を悲しむ間もなく母や叔母とともに捕虜となった彼の最初の移動（旅）は、敵方の住まいである石上へと向かう屈辱的なものだった。そこで一晩母と過ごすことを許された彼は、すぐに一人引き離され、母と安康天皇の婚姻、戴冠式を見るに及んで、「母を忘れた」という言葉を繰り返すようになっていく。やがて円大臣邸に預けられることになってからの彼は、母が自分を見捨て、安康天皇との日々を楽しんでいるように思えてならず、言い知れぬ寂しさを抱き続ける。

母への愛情と憎しみ、二つの間を絶え間なく揺れ動く彼の「心」は、彼が円大臣邸に落ち着くことを許さない。第二の母とも慕う叔母・若草香王女を探し求め、馬を駆ってその囚われ先である朝倉へと向かう。王女に会い、母を恨む胸の内を打ち明けた直後、円大臣の舎人により一旦は邸に連れ戻された彼であったが、やはり居場所を得ることができず、再び邸を後にすることになる。こうして日を追うに従い、母への想いと義父への嫉妬はいや増していくが、以上のような眉輪王の心的状況は、エディプス・コンプレックスでいうところの異性の親への愛着と、その表裏をなす父（義父）への敵視そのものであろう。また、謀反人の息子とされてしまった眉輪王が、安康天皇から罰せられることへの不安を常に抱え持つ存在である点も、同性の親から罰せられることへの不安を感じる傾向を示すというエディプス・コンプレックスを地で行くものだ。

こうした彼の鬱屈した想いが爆発するのは、安康天皇殺害事件である。朽木蹔の協力を得て故郷・日下の地を踏んだ後、彼女に主導されて根臣の罪を訴えるため、母のもとを訪れた眉輪王は、安康天

皇と母の睦まじい様子を目の当たりにし、激しい憤りを止められない。二人の話を立ち聞き、父を直接死に追いやったのが天皇の軍であったことを知った彼は、その事実に後押しされる形で「悲しみが、次第次第に嫉妬と怨恨に変つて」、天皇に刃を向けるに至る。この刃傷沙汰が実父の仇討ちとしてよりも、母を奪った者への制裁という意味をより強く帯びていたことは以下の一節が端的に表している。

白い王様をどうしても殺してしまふんだ、恐ろしくなんぞちつともない。そしてお母様を取り戻して、（中略）今すぐ、お母様の眼の前で、殺してしまはなくちや、ひどいお母様だから、きつと殺してしまはなくちや。――

このように、本来は「心」のなかで密かに行われるはずの「父殺し」が、実体的レベルで遂行されるのだが、この後、眉輪王は大長谷王子の手で罪人として制圧され、斃されなければならない。それは、家父長制度への抵抗が封殺される状況にほかならないが、本作品において、なぜ眉輪王は成長を遂げることなく潰えたのか。それは、次章で見るように異なる物語が同時並行的に進行していくからなのである。

四　〈童心〉への哀借

作品中、共起するいま一つの文脈は、聖杯伝説に拠るものだ。聖杯伝説とは、アーサー王伝説と深いかかわりがあるもので、「キリストが最後の晩餐に用い、使徒たちが十字架上のキリストの血を受けたといわれる神聖な杯の探索をめぐる中世ヨーロッパの伝説」[9]である。伝説の基本的な形は、次のような形であるという。[10]

漁夫王（または聖杯王）が病み、主人公である聖杯の騎士が聖杯に正しい問いをすることで回復することができるのだが、失敗し、騎士は聖杯探求の使命を与えられるというものである。騎士は数々の試練を乗り越え、聖杯を発見し、漁夫王は癒され国土は再び祝福される。

騎士が試練を乗り越えて聖杯を手にし、正しい問いをすることによって病んだ王の領土を回復する物語。これは、謀反人の子として試練を課された眉輪王が、亡父である「大日下王の黄金の太刀」を携え、父の潔白を証して日下の地を取り戻すべく試みる過程と一致する。眉輪王にとって、いまや荒野と化した生まれ故郷を蘇らせることは、すなわち「子ども」である自分の拠り所、幼時の原風景を我が手に取り戻すことにほかならない。つまり、『眉輪』に埋め込まれたもう一つの物語とは、失われた子供の時分に回帰し、「子ども」の「心」を再び手にするための試行であるといえよう。

思えば、野溝は前作『山梔』において、この聖杯伝説を次のように咀嚼し、語っていた。

「阿字子。あなたは、いつか、空に、こんなお話をしていたじゃないの。森の奥に、母さんと二人きり住んでいた少年が、或時騎士の革帯を見てから、もうどうしても母さんから、離れて行かなければならなくなって、ならなくなって行ってしまったのだって。それから、恐ろしい罪に呪われて彷徨って、歩って、

でも、おしまいにはとうとう聖杯を見ることが出来たのだって。」

（中略）

「阿字子は、革帯を見たんじゃありませんか。だから、どうしても浄められる時が来なければ、嘘だと思うわ。（略）」

男として戦いに出る運命に逆らえずに母のもとを離れた少年が、一度は「恐ろしい罪に呪われて彷徨」うものの、「おしまいにはとうとう聖杯を見」るというストーリー。この前半部は、『山梔』の主人公・阿字子が、少女期を終えて適齢期を迎え、母との心的距離を広げていく現在と重なる。後半部の復活とは、そこで苦痛を味わったすえに、傷つき汚れた彼女の魂が、しまいには「浄められ」、母のもとへと回帰するという意味を持つ[11]。この『山梔』の例に照らすと、『眉輪』における聖杯伝説の意味が、一層明確になるだろう。また、朽木媼がいう「王様に、もうすぐお母様をとり戻して差し上げますよ。きつといまに王様が日下にも石上にも自由においでになれますやうにして差し上げますよ」の内実が、眉輪王の心的レベルでの幼時回帰を意味することも、分かりやすくなるのではないか。

一方で、少年の確かな成長をエディプス・コンプレックス現象に則って進行させていく語りが、同時にその逆行ともいうべき志向を抱え持ってしまうということ。このような自己撞着が破綻を来さないはずがない。果して、眉輪王の生は二つに引き裂かれ、ついには絶命を余儀なくされてしまうのである。亡父と安康天皇との衝突や眉輪王による安康天皇の刺殺、大長谷王子による眉輪王の討伐など、一編を通して度々繰り広げられる大小の争いは、眉輪王の心中における葛藤のあれこれを形象化したものといえるだろう。

ここで着目したいのは、見てきたような〈童心〉の復活を目指す動きが、眉輪王本人による積極的な働きかけというよりはむしろ、枯木媼に先導され、しだいに雑兵の志自牟や円大臣の娘・韓媛、そして広く世間の人々の熱烈な支持に背を押されて進行していく点だ。つまり、『眉輪』が表現しているのは、成長段階にある本人ではなく、むしろ彼を取り巻く人々における〈童心〉への愛着と、それへの強い回帰願望であるといえよう。眉輪王による国土奪還の試みは、一見、彼に特有の個別的な事柄として描かれるが、その実、前述したような叙事詩の性質そのままに、人々に共通の意識として〈童心〉の復活を謳い上げる動きともなり得ている。話が進むにつれ、眉輪王の呼称が「眉輪王」から「子ども」へと統一されていく語りは、事が個人の体験を越え、普遍性を帯びていることを示していよう。眉輪王は、〈童心〉そのものの象徴としての相貌を帯びていくのである。

具体的に流れを辿ってみよう。枯木媼は、長年仕えてきた大日下王・若草香王女が悲運に見舞われた後、引き離されてしまった王妃や王女、眉輪王それぞれの居住地を往還して彼らの仲を取り持ち、また日下の地が取り戻される日のために様々な根回しに余念がない。根臣の悪業を知悉する志自牟と出会い、事の真相を聞き出すと、彼を手なずけて眉輪王を日下に迎えるための準備をともに推し進める。また、しばしば円大臣邸を抜け出てくる眉輪王に伴走し、彼に父の無実と根臣の罪科を説いていく。この真実を一刻も早く義父に告げ、自分たちの無実を天下に向けて広く明らかにするよう、働きかけていくのである。

ところで、この朽木媼が眉輪王と移動する道中、馬に乗る様子は、しばしば「馬に乗った猿」と形容されるが、これは「意馬心猿」（煩悩）を示す図像を想起させ、興味深い。朽木媼は煩悩を象徴する人物として描かれるのであり、それはとりもなおさず、彼女が敢行する日下の地の奪回（つまり、〈童心〉の回復）が、彼らにおいて煩悩にも似て、矢も盾もならない強い欲求であることを象徴しているだろう。

その間、多くの人々が眉輪王に惹きつけられていく様子が語られる。当初、朽木媼の強引さに引きこまれて眉輪王の一件に関わることになった志自牟は、「美しい月夜」のもと、眉輪王と「力競べ」をして遊ぶほどに「心」を許すようになり、「完全に二人の為の誠実な味方になることを一人勝手に心に誓つた」。円大臣は、安康天皇の命を受け、眉輪王を預かることになった身だが、しだいに彼の保護者として積極的な姿勢を見せはじめ、ともすれば危険にさらされそうになる眉輪王を手を尽くして探し続けた挙句、しまいには彼と運命をともにし、大長谷王子の刃に果てる道を選ぶ。また彼の娘・韓媛も、大長谷王子から身を挺して眉輪王を庇い、彼の死後は、根臣の罪を王妃や王女に伝え、日下の地を取り戻すために奔走する。これら固有名を持つ人物だけでなく、名もなき人々・眉輪王と面識がない民衆もまた、広く彼の存在を愛しみ、彼が日下に戻ること、そして真実を訴えるために安康天皇と面会する道のりを温かく見守るようになっていく。

廃墟と化した日下の地を共に訪ねた朽木媼と眉輪王を、周囲の住人は好意を持って迎え入れる。

人々は、決して姿を現はさない幼い王に、云ひ難い親愛と奉仕の情をつくしてゐる。（中略）さうして、小さい王の存在は、次第に神秘なものになり、日下の廃墟は里人の信仰の殿堂かのやうに見えて来た。

眉輪王に「親愛と奉仕の情」を尽くし、その存在を「神秘なもの」と感じるようになった人々は、「眉輪王を守護しなくてはならない」と、「彼方から一群、此方から一群と廃墟に向つて蝟集」し、「警戒の位置についた」。また、眉輪王が父や自らの潔白証明のために安康天皇のもとへと来城する様子は、次のような歓迎に包まれてのものであった。

入日を恰も円光のやうに背にして、眉輪王は石上の巷を過ぎ通つた。（中略）

眉輪王、眉輪王。ふと認めて囁き合ふ人々の口から、次第に声高く呼ばれるその名は、一種名状し難い歓呼の声と変つてしまつた。

神仏の加護を受けるかのように「円光」を背負った眉輪王の入城行進は、沿道の人々から声高に称賛され、歓呼の渦を形成していく。こうして、「子供王が凱旋将軍のやうに迎へられる」有り様や、「道沿ひの群衆が王に示す好意や親愛」の情は、それを隠れ見ていた悪人・根臣の「心」をさえ激しくかき乱すほどであったという。

こうした眉輪王に対する末広がりの共感と支持は、単に眉輪王その人への愛憐を表すのにとどまらず、彼ら大人のなかに呼び覚まさ

れた〈童心〉崇拝の反映でもあるだろう。王族の身分で、また謀反人の息子という特異な少年のなかでひっそりと進行する成長と、それを食い止めようとする力との壮絶なドラマは、決して彼に固有なものではなく、多くの人々に共有されうる心理的な経験であることを雄弁に物語る現象である。『眉輪』は、子どもが成長過程で喪失を余儀なくされる〈童心〉の行方を辿るとともに、それを悼み、その火を消すまいと力を尽くす大人たちの姿に光を当てた作品でもあるといえよう。

五　照らし出される「心」の葛藤

眉輪王の存在は、その無垢な透明性ゆえ、周囲の大人たちの「心」のなかを写し出す鏡として機能している。見てきたような眉輪王の移動・旅は、彼の威光をもって周囲の大人たちの内面や、心的葛藤を映し出す行程ともいえよう。それらの人々皆が、眉輪王および彼の体現する〈童心〉を恐れ、あるいは崇拝するようになる様子が語られていく。

その極端な例としては、根臣と大長谷王子の場合が挙げられる。例えば、天皇からの使者であるにもかかわらず、宝冠を奪い、大日下王を天皇の意に逆らう賊臣に仕立て上げた悪党の根臣。彼の「心」に生じる迷いや恐れを、作品は実に細かく映し出す。宝の眩さに目がくらんだ根臣は、これを横領した後、罪が発覚しないようにしなければならないと焦り、「大日下王の死を願」う。時に「良心らしいものの閃きを感じ」、「後戻りをしてもまだおそくはない」と迷いつつも、押羽王に罪の片棒を担がせようと姦計を巡らす彼は、一方で「どこかに逃げて行きたい」と思わずにはいられない。

保身のため、宝冠の受取人であった王の近侍・真椿の殺害を思い立った自分を「ああ恐ろしい俺め、たぶん、たぶん、これは俺ぢやないんだ」と恐れ戦く一方、「我に鞭つて、邪悪な勇気を揮ひ起」さざるを得ない彼の「心」が、安まることはないのである。若草香王女の眼が、「すべてを知つてゐるのだとでも云ひたげな」ものであるように見え、「あの女が殺せるかしら、いや、殺せない。いや、殺さなくちやならないのだ」などと焦燥感を募らせた彼は、その後も被害者筋である眉輪王の噂を聞くたびに翻弄されていく。その結果、真相を知る配下の志自牟が宝を元に返すよう説得する声を、自身の内なる声と錯覚するまでに病的な状態に追い込まれた根臣は、宝を返しに戻った現場を朽木媼らに捉えられることになる。根臣と志自牟との対話は、根臣の心中における葛藤を象徴的に示すものだろう。時間が経つにつれ、彼は眉輪王側の勢力に強く支配され、その邪心を抑え込まれていくのである。

大長谷王子もまた、従来の血気盛んで残忍な人物像を大きく覆し、繊細な内面を披歴するようになる人物だ。「野の獣のやうに、人間を屠つて見たい」と「邪悪な想念に憑かれ」、「荒らかな魂」を露わにする王子は、当初は常に「血に渇」いた青年と周囲から眼差されているが、語り手により、実は孤独を抱え込む人物であることがしだいに暴かれていく。彼の「心」を開き、大きく変えていくのは、大日下王の妹・若草香王女と、前述の韓媛である。大長谷王子は、根臣を信じたために、若草香王女を兄・安康天皇に背いた謀反人の身内と思い込み、憎き彼女に恥辱を味あわせようと、朝倉にある自邸に彼女を連れ込む。当初、彼女を「戦利品」として扱い蔑んでいた王子が、彼女を愛しく思い、己の手荒な行為を後悔するようにな

るまで、そう時間はかからない。「王女に遇つて後に、初めて彼自身の中に何物かが形作られつつあることを意識した」王子は、人や獣に対する殺傷行為を逡巡し、思いとどまるようになっていく。度々その牙を鈍らせるようになる王子に不安を感じる従者の様子が、次のように述べられる。

> 勢子達は勢子達で、何か王子の気先に不安定なものをしきりに感じるので、堪らないやうに見えた。（中略）例えば、道端の負傷者を、わざわざ馬を停めてまで顧みる。また、少年が泣いてゐるのを見ると、馬から下りてしまつたり、〝可哀さうに〟などといふ言葉がその唇から洩れたり、道つぷちのお婆さんを、巫女かなんぞのやうに懼れたり？

王子自身も自分の変化に戸惑いを隠せず、「心」に葛藤を生じる。また、王女との関係に悩み、ふとしたことから通うようになった韓媛のもとで、その「心」を癒すようになった彼は、「女性といふものは、心を持たないものであらうか」などと問うようになる。これまでは考えることなどなかった女性の内面に、思いをいたすようになるのである。

こうして変心した大長谷王子は、やがて眉輪王や円大臣を滅ぼすべく大臣邸に攻め入る件において、〈童心〉の存続に尽力する円大臣に「誠実な気高い魂」を見、その目に「自らの意志に於いて最善をつくす人の崇高な光」を感じるようになっていく。眉輪王を死に追いやった彼だが、内心ではこの争いの結末に一抹の苦さを噛みしめるのである。

これら眉輪王に敵対する側の人間だけでなく、眉輪王の母や叔母でさえ、彼により良心を掻き立てられていく存在だ。母である王妃は、夫・大日下王が亡くなった後、その敵となった安康天皇に嫁ぎ、天皇を愛するようになった自分を責めてやまない。天皇の命に従い、眉輪王を円大臣邸に追いやった自身を激しく悔やむ。また、王妃を度々断罪する叔母の王女も、敵側の大長谷王子に凌辱された自分を深く恥じ、あろうことか王子を憎からず思うようにさえなってしまったその「心」を、長い間直視できない。それゆえ彼女は、眉輪王と対面する場面でも、彼に顔を見られることを嫌い、彼の眼を手で塞ぐという行動に出る。彼女たちは、こうした後ろめたさを抱えつつ、それを払拭するように、先に見た朽木媼や韓媛と手を携えて志をともにし、眉輪王亡き後、日下の地を復興させていくことになるのである。

おわりに

以上、『眉輪』は歴史小説の枠組みを用い、象徴や寓話を鏤めながら、〈童心〉が喪失と復活のはざまで揺れ動く様子を描き出した作品であることを読み解いてきた。野溝は同時期に、〈童心〉の復活を希う女性を主人公とした『山梔』を発表しているが、その末尾は、何かに追われるように家を出ていく彼女の姿を写して閉じられており、その成就はいまだ覚束ないものであった。

確かに、『眉輪』においても〈童心〉の保持は、きわめて困難であることが眉輪王の死や、大小の争いを通じて示されてはいる。しかし、それは見てきたように多くの人々の支持を得るものとして描かれていくのであり、小説の結末も、女の連帯による〈童心〉奪還

の可能性を色濃く感じさせるものとなっている点は注目に値しよう。野溝は自身、終生、少女の「心」を持ち続けた人物とされているが、彼女にとって〈童心〉の存続、大人における〈童心〉の在り方というものが、いかに大きなテーマであったかをうかがわせる作品となっている。

このように読解してみると、発表までに七五年を要した『眉輪』は、題材を皇室に採り、歴史的な大逆罪を焦点化しているにもかかわらず、時局や制度とは直接対峙することのない、きわめて内的世界を扱った小説であるといえるだろう。

注

(1) 岩切信一郎・滝正人編「野溝七生子年譜」(『野溝七生子作品集』立風書房、一九八三・一二)

(2) 岩切信一郎「年譜――野溝七生子」(野溝七生子『山梔』講談社文芸文庫、二〇〇〇・二)

(3) 小平麻衣子「青白き光芒――野溝七生子「眉輪」を読む」(『日本文学』第五九巻七号、二〇一〇・七)では、「この物語は、穴穂王と王妃が近親相姦とする説を取り」、「その関係性をほのめかしている」と述べ、それと対立するのが「大長谷王子と王女の、肉体の関係を避けられない異性愛」であるとしている。

(4) 荻原浅男校注・訳『完訳日本の古典 第一巻 古事記』(小学館、一九八三・八)を参照した。

(5) 宮澤豊穂訳『日本書紀 全訳』(ほおずき書籍、二〇〇九・四)を参照した。

(6) 小平麻衣子前掲論文では、「歴史小説」ではなく、「当代の吟遊詩人による創作とみなすのが至当であろう」と述べている。

(7) 小学館『大辞泉』編集部編『大辞泉』(小学館、一九九五・一二)。

尾島庄太郎『叙事詩の研究――象徴と伝統』(北星堂書店、一九八〇・六)では、「その内容は、かつて起った出来事や、記憶せられている歴史、または神話・伝説に基づいてうたわれる」、「主題としては、国民的な英雄についてうたわれる。英雄が勇武を発揮した戦闘についてうたわれる。また、英雄の勲功があつかわれる」とある。

(8) 野村総一郎ほか監修『こころの医学事典』講談社、二〇〇三・三

(9) (10) 前掲『大辞泉』

(11) 『山梔』については、拙稿「野溝七生子『山梔』――〈美しい魂〉の復活へ向けて」(新・フェミニズム批評の会編『大正女性文学論』翰林書房、二〇一〇・一二)で論じた。

〈付記〉『眉輪』の引用は、野溝七生子『眉輪』(展望社、二〇〇〇・二)に拠る。また、『山梔』からの引用は、同『山梔』(講談社文芸文庫、二〇〇〇・二)に拠り、それぞれルビは適宜省略した。